

財団日より

# 多摩川

1985. 12. 第28号



グンパイトンボ  
(モノサシトンボ科)  
後足が平たく軍配状になっているのでその名がある。  
中・下流に5-7月出現。



世田谷のボロ市・1976年12月撮影 (写真・世田谷区立郷土資料館提供)

## ■ 多摩川博物誌 ■

### ⑫ 世田谷ボロ市 (世田谷区世田谷)

12月15、6日は世田谷区世田谷三丁目の、三軒茶屋から分かれて多摩川をへて稲田登戸へゆく旧津久井街道筋にボロ市という、変わった名の市が立つ。正月の15、6日にもあって世田谷の名物というより東京の名物となっている。この津久井旧道には、小田原北条氏以来の代官である大場家の屋敷が今でも残っていて、世田谷代官屋敷として、都の文化財指定になっている。

このへんは戦国時代吉良氏が采配を振っていたところで、北方に世田谷城もあり、小田原と江戸を結ぶ宿駅の交通の要地として栄えていた。小田原北条氏は世田谷に薬市というものを行なわせて発展に助勢した。薬市というのは毎月一定の期間開かれて、誰でも自由に店を出すことが出来、それで税金を払う必要もないという、気の楽な市というので商人には有利なものであった。ただしこの市では喧嘩口論をしないこと、押し売り、ろうぜきは堅く禁止されていた。市を開く日は1と6の日となっていた。さいころの数日から来た日どりである。1日、6日、11日、16日、21日、26日が月中の催日で、31日は1日に編入されていた。

北条氏が小田原城で亡びて、この世田谷の市も、

その余波でさびれてしまった。この付近はまだ農家が多いので市の売りものは農具が主であった。それに野良着用の古着類も多く売られた。これがボロ市とよばれるところとなった。

木綿類は農人の衣類と定められていて、絹物は持っていても着ることは許されていなかった時代が長くつづいていたので、ボロといっても、ボロボロの意味でなく、良質の木綿布をつぎ縫いして、まとめた農作用衣類が、その名で呼ばれ、古着と共に新品が売られたわけである。こうしたボロ着類の露店の方が多かったので、つい本名称となってしまう。

現在のボロ市に出る品物は雑貨が多くなって、すっかり性格が変わっている。わずかに名残りを示す古着屋が数軒出てくる。時代と共にこの付近の人の生活形態も変わってきているので、市の売り物も、それに合うものになるのは必然のことである。

昭和の初めごろには市の廃止もいわれたが、今ではこの地区の商店街発展策の一つとして保存され、年々さかんになっている。

「東京生活歳時記」社会思想社1971

## 多摩川散歩

### ●世田谷のボロ市

元世田谷区立桜小学校長 長田 美雄

世田谷のボロ市は、早く文学に名を得た。幸徳秋水は、「荏原郡は世田谷宿にぼろ屑物の市ありて、一年中の賑いを極む。都人の嫌がる雑踏を、自然の単調に厭ける近郷近在の老若は、市の風に吹かれるれば無病息災、百難を遁るとて、三里五里の道を此処に集まり、穢なきぼろ屑物を買取るを無上の樂とはなすなり」(世田谷のぼろ市)。また徳富蘆花は『み、ずのたはこと』に「世田ヶ谷のボロ市は見ものである。松陰神社の入り口から、世田ヶ谷の上宿下宿を打通して(註・今は下宿は省く)、約一里が間は、両側にずらりと店が並んで、農家日用の新しい品は素より、東京中の煤掃きの塵箱を此処へ打明けた様なあらゆる檻樓やガラクタをずらりと並べて、売る者も売る、買う者も買うと、唯驚かる、ばかりである」(村の一年)と書き詳細に紹介している。北原白秋には「ぼろ市に冬はまづしき道の下桜小学に通ふ子らはも」、斎藤茂吉には「北平も巴里も知りてわれ居れど此処の檻樓市にしばし親しむ」の詠がある。

毎年12月と正月の15・16の両日、世田谷区世田谷1丁目、通称ボロ市通りに開かれる。訪れる人は東急世田谷線(旧玉電下高井戸線)の上町又は世田谷駅で下車、南へ1~2分歩けばよい。当日は駅から人の波だから道をたずねる必要もない。

市の売物は昔とは一変している。秋水は「ぼろは足袋、股引、シャツ、手袋、手拭……、荒物は柄杓、硯箱、火鉢、茶盆……」と数えあげた上、「おかしくもまた憐れに感ずるは、此等の品物、穀類を除くの外は一として満足なるはなく、破れたる足袋の左は十文、右は九文なるがあれば、穴あける靴下の右は黒にて左は白なり」などと書いているが、これが明治中・終りごろの実情で、ここから「ボロ市」の俗称が生まれ、市の名を天下に轟かしたのだが、それ以前は市町と呼んでいたし、売品も農家の必需品が中心だった。今は、名残を留める古道具、古着、骨董品類等はあるもののボロは影をひそめ、近代的な商品もふえた。今

最も特徴的なのは植木、花卉の類で、市の特色ともなり、住宅地発展の必要にも応えている。出店者は区内が一番多いが、都下、他府県にわたってはほぼ首都圏を覆い、遠路訪れる客も少なくない。

ボロ市の伝統は古く、発祥は四百余年前にさかのぼる。戦国末期の天正6年(1578)9月、小田原城主北条氏政が世田谷新宿(現在の1丁目)に下した「楽市掟」が発端である。楽市とは特権を排除した自由市、誰でも自由に开店できる市のことである。当時は一六の日、即ち1、6、11、16、21、26の六日が定日、月六回立つので六斎市といった。天正18年小田原落城で市はさびれ、歳の市として存続したのが、明治の改暦によって現在の開催日に落ちついたものである。発祥の時からこの市の管理に当たったのが、後に彦根藩の世田谷代官を勤めた大場家で、今も現当主大場信邦氏が、ボロ市推進委員会の委員長に任じている。

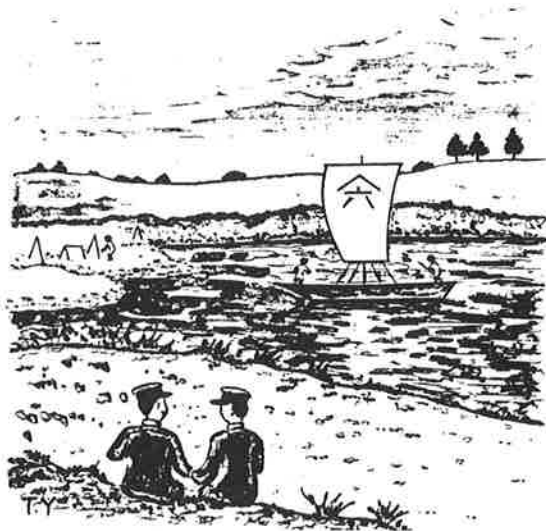
世田谷のボロ市は、このボロ市推進委員会がその中心となって、世田谷区役所、世田谷警察署のバックアップにより、運営している。この方式は他の市にはほとんどみられない理想的なものであり、この市の最大の特徴ともいえよう。こうしたガラス張りの運営で市は明朗清潔、和気藹藹のうちに企画され準備され、幕が開き、閉じるのである。安心して見、歩き、買い物のできる真に近代市といってよいであろう。



(世田谷区立郷土資料館発行)

「世田谷ボロ市の歴史」より抜粋)

## 私と多摩川



大正15年11月旧二子橋附近から東京側をスケッチ・帆かけ船が砂利舟（画・山路虎雄氏）

福田社会福祉研究所主宰 福田 重信

私は明治43年多摩丘陵の<sup>山間</sup>のあまり豊かでない自作農の長男として生れた。従って10才位から、多摩川の渡船場まで、東京の青山辺から、下肥（屎尿）を荷車に積んで来る父を迎えに行ったのである。その頃は多摩川の河川改修が完成せず、一帯は白砂青松でその中を、銀色に光る一条の水路が流れ、帆をかけた砂利舟や筏が流れ、まことに美しい景色であった。

しかし、見た眼にはそのように美しいが、農民にはこの川を渡ることは容易ではなかった。それは何か月に1回（台風期には2回あったかも知れない）多摩川に洪水があると、これまで踏みかためてあった道が、あとかたもなく流れ、砂礫の河原になってしまうし、船着場もその度毎に変わり、荷車を引いて河原を歩むことが困難なので、農家の主婦や大きな子供は、荷車の後押しをするため、ここまで迎えに来たのである。

現在の川崎市宮前区や横浜市緑区の人々は、更に高津区下作延の通称「ねもじり坂」（大山街道・

県道厚木東京線）という難所があったので、耕作農家では更にこの荷車の後押しは重要な仕事となったのであろう。

これが、私の父に対する労力提供であったのであるが、大正14年春、私は東京府立園芸学校（日本に二つしかない園芸専門の甲種農業学校）に進学したので、この荷車の後押しは私の日課にはなくなったが、同年8月（川崎市史年表には7月とあるが、私の記憶では8月である）多摩川に鉄橋が、架せられるまでは、渡船を利用し、自転車通学をしたが、鉄橋が架ってからは、通学も大分楽になった。

だが雪の日や雨の日は、多摩川の橋（二子橋）は高いところで、風よけになるものはないので随分寒かったのを今でも覚えている。

それでは二子橋が架設されるまでのことを簡単に記述したいと思う。二子多摩川には昔から橋はなかった。これは江戸幕府時代から防衛の必要上わざわざ橋を架けなかつと言うが、私は寧ろ、多摩川は延長が短いのでしばしば洪水があり、技術上この川に架橋することができなかったのだと思う。

ところが、大正10年11月16日から20日まで陸軍がこの地方で、特別大演習を行うことになったが、その頃から軍の装備もしだいに重装備化していたので、大軍を渡船で輸送することはできないので、工兵隊が、二子多摩川（旧二子橋のあるあたり）に木造で、水流のあるところに橋を架け、演習終了後はこの木橋は地元自治体に管理させられたので、地元民は大変喜んで利用したが、翌年また洪水でこの木橋は流失してしまった。

そこで地元関係自治体は渡船組合を結成し、大正14年7月（或は8月か）に至るまで無賃渡船を経営し、二子橋が完成するに及んで二子の渡船は消滅した。そして、この橋を通過して昭和2年7月15日玉川電車（通称玉電）が溝口まで乗り入れたので、多摩川を廻る環境は一変し、しだいに都市化にと向かったのである。



## ●イベント河川

### 山道省三

二子玉川周辺の河川敷は、公園やグラウンドの整備が進み休日には多くの人が集まる。このところその傾向がますます大きくなったように思えるが、10月27日の日曜日、その二子玉川の河川敷で世界最大の絵画展が催された。世界最大といっても長さのことで、高水敷の公園やサイクリングロードに布に描いた動物や植物の絵をつなげて延長3kmにしようとするものである。絵を描いた人は日比野公子さん。地球上にいる約800種、3000匹の動物を約1年がかりで描き、自然の豊かな多摩川に現代の鳥獣戯画を公開しようとしたのであった。そしてこの絵を展示するため約2700名のボランティアが参加、後援に建設省、世田谷区、(財)日本自然保護協会、協賛に民間企業が数社参画している。

多摩川に限らずこのところ川でさまざまなイベントが催されるようになってきた。ちなみに首都圏の主な河川で催されるものをひろい出してみると次のようなものがある。

- ・自然観察会……都内各所、恒例化
- ・サケの放流……多摩川水系各所、恒例化
- ・川原を歩く会……多摩川水系各所、恒例化
- ・花火、灯ろう流し……多摩川水系、隅田川  
恒例化
- ・川船下り……隅田川、神田川
- ・イカダ下り……多摩川
- ・カヌー大会……横浜市内河川、恒例化
- ・マラソン大会……多摩川、恒例化

- ・レガッタ……隅田川、恒例化
- ・寒中水泳……隅田川
- ・伝統漁法実演……多摩川

その他祭りに伴う行事など数多い。これらの全てがイベントという表現が適切かどうかは別として「川の中に入って楽しもう」とする精神は、少なくともそれが川でなければできないことなら大いにけっこうな気がする。水質汚濁が著しい時期には影をひそめていた事からするとなおさらだ。

しかしながら一方では川らしい使い方とはいえ、節度のない使われ方も増えてきた。そのひとつにオートバイによるモトクロスがある。確かにモトクロスの条件が川原と合致することはあるにせよ、都市の身近かな自然地として貴重な場で行うには問題がありすぎる。多くの人間が出入りする場では危険すぎるし場を独占することにも問題がある。それ以外にも使う側のマナーが問われていることはたくさんある。釣りの針やゴミの始末の悪さ、自動車の川原への乗り入れなど。

川でのイベントは多様化し恒例化しつつある。管理者である国や自治体も積極的に押し進めているし、冒頭の例にもみられるように多摩川に大勢の人達が集まるようになってきた。しかしながらこうなると人が多く集まることによって川原が荒廃していくことも予想しなければならぬ。

昭和55年に策定された「多摩川河川環境管理計画」では空間利用計画については詳細が検討されたもののそれを維持していく仕組みまでには及ばなかった。おそらくこれ程長大な場所の管理については、限られた人数ではとても対応できるものではない。従って、流域自治体や地元の住民、漁協といった常に目の届く人達の協力を得るような仕組みを考えていくべきではなからうか。空間利用計画よりむしろその方が先とさえ言える。人がせっかく集まり始めたわけだから鳥合の衆とならないためにも早急にその対策が望まれる。

# 《“多摩川およびその流域の環境浄化に関する” 調査・試験研究”募集》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行なってきました。既に171件の研究に対して助成金を交付し、113件の研究成果を得ることが出来ました。

昭和61年度も引き続き大都市東京圏における「多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・試験研究」をひろく募集いたします。

対象者は、学識経験者は勿論、一般の方でも研究に意欲のある方でしたら、どなたでも応募できます。

## 研究対象

### (1) 人間活動と多摩川およびその流域との環境に関する調査・試験研究

産業構造の地殻変動とそれに伴う生活環境の変化がさまざまな社会現象を起こす中で、人々の余暇時間は増加し、欧米に類をみない速さで高齢化社会が到来しようとしています。この時期に大都市東京圏の代表的河川、多摩川およびその流域の位置づけを考える土地利用、都市計画の研究は重要なことです。又、人は川にいかなるふれあいを求めるべきかを知る、川の文化の研究も待たれる研究の一つです。

### (2) 多摩川水質の汚染の防除に関する調査・試験研究

水質調査は精緻なもの、地区ごとのもの、環境教育に役立つもの等さまざまです。調査の結果が、その地域、地区に役立つようなユニークな水質調査が望まれます。

## 年度別助成件数・助成金額

年 度	研究区分	助成件数			助成金額(円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	6	—	6	9,500,000
	B類	—	—	—	—
	計	6	—	6	9,500,000
昭和51年度	A類	5	6	11	19,994,120
	B類	—	—	—	—
	計	5	6	11	19,994,120
昭和52年度	A類	17	4	21	28,285,010
	B類	6	—	6	1,984,900
	計	23	4	27	30,269,910
昭和53年度	A類	8	14	22	28,401,840
	B類	6	5	11	2,892,500
	計	14	19	33	31,294,340
昭和54年度	A類	11	13	24	36,875,240
	B類	7	5	12	3,381,490
	計	18	18	36	40,256,730
昭和55年度	A類	12	13	25	39,277,250
	B類	7	6	13	2,672,800
	計	19	19	38	41,950,050
昭和56年度	A類	9	13	22	40,973,500
	B類	4	5	9	2,187,400
	計	13	18	31	43,160,900
昭和57年度	A類	17	10	27	38,263,235
	B類	8	4	12	4,369,870
	計	25	14	39	42,633,105
昭和58年度	A類	10	18	28	44,547,920
	B類	8	5	13	7,835,654
	計	18	23	41	52,383,574
昭和59年度	A類	9	16	25	41,818,380
	B類	4	6	10	6,567,298
	計	13	22	35	48,385,678
昭和60年度 (10月1日現在)	A類	11	11	22	40,248,775
	B類	6	5	11	7,208,640
	計	17	16	33	47,457,415
合 計	A類	115	118	233	368,185,270
	B類	56	41	97	39,100,552
	計	171	159	330	407,285,822

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究

上水、下水、工業用水、農業用水等、水の利用は多岐にわたります。行政とは別の視点から水の利用を考えることがこの研究です。親水利用、保水利用もこれに入ります。

辺の良好な景観を保つ研究も対象となります。

以上研究対象を4項目に便宜上分けて記しましたが、多摩川という大都市東京圏を貫流する都市河川からその影響を及ぼす河川環境、ときには都市環境を考えなおす研究がこれに属します。

(4) 多摩川をめぐる自然環境及び人文環境の保全創造に関する調査・試験研究

生物生態は、環境の歴史そのものです。この種の調査研究は息の長い研究です。多摩川のような都市河川は、自然の保全は無論ですが、地域社会、人間との係わりについての研究が重要視されます。川のレクリエーション、川

公募締切日 昭和61年1月31日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号  
(地下鉄ビル内)

電話(03)400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

## 財団の事業紹介

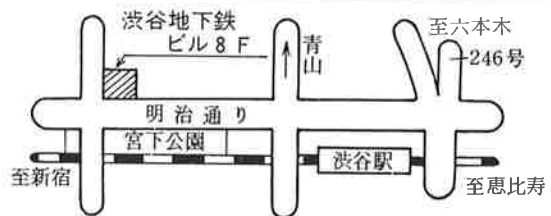
### 〈研究助成〉

去る、10月18日第19回定時選考委員会を開催し、昭和60年度(第2次)研究助成課題の選考を行いました。今回選考されました研究は、A

類研究3件、B類研究3件です。研究課題は次のとおりです。

研究課題	代表研究者	所属
〈 A 類 研 究 〉		
● 呑川の悪臭対策と堆積汚泥の浄化に関する研究	西田 耕之助	京都大学工学部教授
● 多摩川下流域における有機物除去機構の研究	落合 正宏	都立大学理学部助手
● 多摩川における表流水および付着層の細菌群集の動態に関する研究	森川 和子	東京農工大学一般教養部助手
〈 B 類 研 究 〉		
● 多摩川中流域(登戸付近)に発生するユスリカ類(Chironomidea, Diptera)の季節的消長と水質指標性について	小林 貞	私立カリタス女子高校教諭
● 多摩川下流域における築堤がもたらした堤内地の環境変化に関する研究	平野 順治	大田区郷土の会会長
● 多摩川流域における地学的素材の教材化に関する基礎的研究	伊藤 久雄	目黒区立第八中学校校長

- 発行日 昭和60年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125